

違和感をバネにしよう

Sense of Incongruity as a Springboard

井上祥平 Shohei INOUE

何年か前のことになるが、ある財団が出した賞の授賞式に出席した。対象は基礎科学の優れた研究者、50歳以下の方を表彰するというもので、科学の各分野に計3名の受賞者があり、その中に私の知人がいたのである。

型どおりに賞状などの授与が行われた後、「本日まで〇〇先生の研究を蔭で支えてこられたご苦勞を謝して」同席の奥様方に花束の贈呈が行われた。よくあることだと思うが、私には違和感があった。というのも、その〇〇先生の奥様もまた研究者で「蔭」どころか「表」で活躍している方だったからである。

もしこれが逆だとどうなるか。受賞者〇〇先生（女性）の研究を蔭で支えてこられた夫君の〇〇氏に花束を、という状況になったのだろうか。男性が研究者でそれを支えるのが女性、という構図が当たり前のように無意識に組み込まれているように感じたのである。

私はさらに昔のことを思い出していた。某大学工学部工業化学科を1956年に卒業したのだが、同級生はすべて男性、大学院も同様であった。助手になってまもなくアメリカのある大学の化学科でポスドクになる機会があったが、その研究室には大学院生にもポスドクにも女性はいなかった。学科全体でも教員、院生、ポスドクに女性は少なかったのだ、ここまで私は女性の研究者というものをとくに意識することはなかった。

それからしばらくして、1969年に東欧の国で開かれた国際会議に出席したあと、ソ連各地の大学や研究所を科学アカデミーの客として訪問したのだが、そこには多くの女性研究者がいるのにびっくりした。さらに1980年、私は文化大革命の余燼の残る中国の北京で開かれた、中・日・米三国の国際シンポジウムに出席した。日・米の参加者（同伴者は別として）には女性はいなかったと思う。しかしシンポジウムの会場を埋めた中国の方に女性が非常に多いのには本当に驚い

た。青い人民服、女性のほとんどは断髪という姿であった。

当時ソ連や中国はもちろん社会主義の国であったから、その体制がこうした女性の社会進出を可能にしていると好ましく思ったものである。それは「制度」としてある意味で上から与えられたものだったかもしれないが、個々の研究者の「意識」としてはどのように捉えられているのだろうか、とも思った。

別の話をもう一つ。最近の日本でのことである。ある団体で、その役員の中の女性の数を増やして団体の構成員の女性比率に近づけるべきである、という提案が女性を中心とするグループから出された。この提案は業務の仕組みを考える別のグループで検討されたのだが、そこでの議論の結果は「女性が役員になると忙しくなり本務先の仕事に支障が出るのでは」というものであった。しかし、他所で役員になって本務先で支障が出るかもしれないのは男性でも同じではないのか。もし男性のほうに支障の度合いが少ないのだとすれば、それは「蔭で」支えてくれている誰かがいるからなのではないのか。たぶんこの検討グループには女性のメンバーがいなくてその視点、意識が欠けたのではないかと、私はこういう結論の出る議論の場に違和感をもった。

男女共同参画を考えると、制度を作っても意識がついていかないと意味がないという議論がよく出る。男性の意識が低いのが最大の問題であるといわれると一言もないが、意識の変革だけを待っていても何も変わらない。男女両性にかかわることの議論をする場には必ず男女両性のメンバーが含まれているようにすること、これが最低限必要な仕組みである。身の回りはどうなっているか。違和感を前進のためのバネにしよう。



井上祥平 Shohei INOUE

東京大学名誉教授
工学博士
京都大学大学院工学研究科博士課程修了
専門は高分子合成、生体関連高分子
E-mail: inoues@tg8.so-net.ne.jp